1.5次産業振興室の取り組みについて

石川県羽咋市
1.5次産業振興室
高野　誠鮮

はじめに

寄稿にあたり、「1.5次産業振興室」を平成17年4月に設置した橋中義憲羽咋市長の考え方をご理解いただくため、その言葉を引用する。

「「志士は溝壑に在るを忘れず、勇士はその元を喪うを忘れず」といいます。今、私達地方都市に求められるのは、こうした国を築いてきた建国の理念ではないでしょうか。山村集落は疲弊し、窮地に立っております。知恵を絞り、資源を活かし、勇気を持ってことに当たれば道は開かれ、必ずや希望が見えてきます。平成17年4月に設置した1.5次産業振興事業は、「一般会計予算60万円で賄え」「一年間ですぐに成果を出せ」と命じた事業です。「市に予算がないから役所はできない」という市民に対する言い訳を私は許すわけには参りませんでした。なぜなら人には知恵が在り、希望が人を創り出し、理想は私達１人１人の心の内に宿っているからです。そして、何よりも小さな羽咋市にはできないと、世間が思っていることを成し遂げる大きな喜びが、私にはあるからです。私には、多くの人の智恵によって問題解決ができる希望の光が見えているからです。否定や不平を口にし、心に不満を残すより、どうすれば現状が打開できるのかを考え、実践する方が最も楽しいからでもあります。」

（2005年度・毎日地方自治大賞特別賞授賞式市長挨拶文より）

農村集落の過疎化・離村・高齢化・後継者不足・農家所得の減少、こうした課題は本市のみならず、全国で見受けられる社会的なアノミーと言えるかもしれない。平成17年4月「羽咋市1.5次産業振興室」が橋中義憲市長によって、この課題の根本的な解決のために設置された。

1.5次産業という名称に込められた意味は、一次産業である農業・漁業を二次産業化させ、生産から販売まで生産者として責任を持ち消費者と直結しながら、生産者と消費者がともに共生し共栄する在り方をめざしている。本稿は、設置後の一年間を振り返りながら、試行錯誤の取組みとその成果、反省点も踏まえ、現状の山村集落、抱える課題、そのための具体的な対策と、そのために実施した内容と実行の手段、事業戦略そして、それらの事業の根底にある理念と具体的な実践について述べてみたいと思う。

本市の取組みの一端が多くの市町村の解決策の一助になれば幸いである。

1　現状と課題（「疲弊する山村集落の現状」）

石川県は本州の中央部にある日本海に突出する石川県・能登半島にある。本市はこの半島の基部西側に位置し、能登への玄関にあたり古くから「口能登」（くちのと）と呼ばれている。市の中央部に広がる邑知地溝帯によって北西部の眉丈山系と南東部の石動山系と